

フィリピン群島における中期－後期完新世の海面変動

Mid to late Holocene Sea-level changes in Philippines

前田 保夫 [1]; 横山 祐典 [2]

Yasuo Maeda[1]; Yusuke Yokoyama[2]

[1] 兵庫県立大・自然環境研; [2] 東大 理 地球惑星

[1] Inst. Nat. Environ. Sci., Hyogo Univ.; [2] Dept. Earth & Planet. Sci., Univ. Tokyo

フィリピン群島は日本列島と同じく両極地方から遠く離れた Far-away にあって、glacial isostasy の影響の軽微な地域である。海面変動研究の具体的な指標となる離水サンゴ礁段丘と古潮汐ノッチはフィリピン群島の海岸全域にわたって分布し、完新世の海面変動を探るには好適のフィールドであるといえる。われわれは、これまでに完新世に形成されたサンゴ礁段丘約 600 地点で高度の測定と化石採集を試み、66 試料の ^{14}C 年代と 50 試料の $^{230}\text{Th}/^{234}\text{U}$ による年代測定を行い、それぞれに対応する潮汐ノッチの retreat point の高度を測り、それを古海面の平均海面高度と認定した。その結果、完新世の古海面の高度は地域によって地殻変動による高度差は、認められるものの、次にあげる 3 つの時期に現海面を上回る高海面期の存在が明らかになった。それらは、7.5-6ka, 5.5-4ka, 2.5-1.4ka であり、このうちもっとも海面が上昇していたのは、5.5-4ka の間である。この最海面期はフィリピン群島のみならず南北ベトナム、タイでも認められ、日本列島においても沖縄をはじめ各地から報告されてきた。この海面上昇は地球的規模で起こった可能性が高い。